

修士論文（要旨）

2019年1月

インターネット依存に関わる心理的変数間の因果モデルの検証

指導 鈴木 平 教授

心理学研究科  
健康心理学専攻  
217J4056  
長谷部 遊

Master' s Thesis (Abstract)

January 2019

Verification of Causal Model of Psychological Variables related to Internet  
Dependence

Yuu Hasebe

217J4056

Master' s Program in Health Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Taira Suzuki

## 目次

1. 背景	1
1-1. インターネットに関する問題点	1
1-1-1. インターネット・パラドックス	1
1-1-2. インターネットゲーム依存	2
1-1-3. インターネット依存	2
1-2. インターネット依存についての研究	2
1-3. 依存についての良い意見	3
1-4. 依存に関連すると考えられる心理指標	4
1-5. 使用コンテンツ	5
1-6. 目的	5
2. 方法	6
2-1. 調査時期	6
2-2. 研究方法	6
2-3. 調査対象者	6
2-4. 調査内容	6
2-5. 使用分析ソフト	8
2-6. 倫理的配慮	8
3. 結果	9
3-1. 記述統計	9
3-2. 各コンテンツ使用量のその他回答	9
3-3. $t$ 検定による男女比較	10
3-4. 相関分析	12
3-5. 依存を説明する変数に関する重回帰分析	16
3-6. 各コンテンツを説明する変数に関する重回帰分析	18
3-7. 各コンテンツおよび依存の平均±1SDのデータについての分析	21
3-8. インターネット利用に関する諸変数を用いた全体のモデル	28
4. 考察	30
4-1. 男女差について	30
4-2. 各コンテンツや心理指標の相関関係について	30
4-3. 依存の重回帰分析の結果について	30
4-4. 利用時間・各コンテンツの重回帰分析の結果について	31
4-5. 依存・利用時間・各コンテンツの高群と低群について	32
4-6. モデルについて	33
4-7. まとめ	34

引用文献

添付資料

## 背景

近年インターネットの普及は目覚ましく、総務省平成 29 年版情報通信白書によるとインターネット利用者数は 2016 年時点で人口普及率 83.5%にも達している。利用端末はパソコン 58.6%、スマートフォン 57.9%とパソコンだけにとどまらず、使用方法も動画や音楽を楽しむことや、アプリやオンラインでゲームをすること、友人などとの電話やメール、SNS など多岐にわたる。

### インターネット依存

インターネット・スマホさらには SNS やオンラインゲームへの依存などはスマートフォン普及に伴い社会問題となった。これらの依存に対して明確な定義はまだされておらず、鄭・野島 (2008) はこれまでのインターネット依存の定義について一貫した基準は見られないものの各研究者ともインターネット依存問題が学業的・身体的・社会的・経済的・職業的な面それぞれに影響を与えていると指摘していると述べている。

### インターネット依存の研究

インターネット依存の研究において対象者は若者が圧倒的に多い。伊藤 (2009) は大学生のインターネットの中毒の実態とネガティブ・ポジティブな心理状態との関係を研究し、58%の学生にインターネット中毒の傾向がみられ、孤独感・抑うつ感・疲労感とは関係がみられたと報告していた。八木 (2017) は大学生約 1000 名のインターネット依存と性格特性の関係について調査を行い、インターネット依存傾向が高いほど、外向性・協調性・勤勉性・情緒安定性の平均値が有意に低かったと報告している。

また依存について悪い面が多くみられがちであるが平成 23 年版総務省情報通信白書では携帯電話の SNS 利用について、毎日が楽しくなった (79.9%) や人にやさしくなれるようになった (38.1%) など良い意見も見られた。

### 目的

インターネット依存に関連する、抑うつや孤独感・ソーシャルスキル・性格特性について関係性を改めて調査するとともに、主観的幸福感と情動コンピテンスについてもインターネット依存の関連を調査する。また、心理指標とともに各インターネットコンテンツの使用量と心理指標の関係性を調査し、インターネット依存について、使用コンテンツと使用量という角度からも検討していく。

さらに本研究では様々な心理指標とインターネット依存、コンテンツ使用の関係性を、モデル分析を使用し整理する。その中で可能であれば、インターネット依存傾向にあるにも関わらず満足感を感じているという報告について考察することを目的とする。

### 方法

#### 対象者

都内私立大学学生 326 名であった。記入漏れなどが多く、使用できないデータを除き有効回答 312 名 (男性 124 名 20.23±1.53 歳、女性 182 名 19.86±1.33 歳、年齢もしくは性別未記入 6 名) を分析対象とした。

#### 質問紙

以下の質問紙を使用した。

- ・フェイスシート

- ・インターネット中毒テスト（ユング著・小田島訳, 1998）
- ・TIPI-J（日本語版 Ten Item Personality Inventory）（小塩・阿部・カトローニ, 2012）
- ・改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版（諸井, 1991）
- ・POMS 日本語短縮版（横山, 2005）
- ・情動コンピテンスプロフィール日本語短縮版（野崎・子安, 2015）
- ・主観的幸福感尺度（伊藤・相良・池田・川浦, 2003）

## 考察

依存について男女差は確認されず、コンテンツの使用については、男性は女性よりゲームの使用が多く女性は男性よりも SNS と連絡の使用が多かった。

相関関係については全体のデータ・男性のみのデータ・女性のみのデータ、全てにおいて、各コンテンツや利用時間と高い相関関係を示す心理指標はほとんど確認できなかった。

### モデルについて

今回のモデルでは協調性・開放性から依存へ依存から利用時間・各コンテンツへさらにその先に主観的幸福感をというものであった。依存からゲーム・SNS・利用時間また依存から主観的幸福感への直接のパスはそれぞれ有意であったが、コンテンツから主観的幸福感へは有意ではなかった。このことから依存という状況自体は主観的幸福感を低下させるものであるが各コンテンツの使用が同様とは限らないと考察できる。

これは依存している状態自体は主観的幸福感を下げるものの、その依存によって起こる各コンテンツの使用量の変化は主観的幸福感とは関係がないと推察できる。

協調性と開放性は一般にポジティブな変数ではあるが、このモデルからは協調性と開放性は依存を促進することもある可能性が示唆された。さらにこの結果から、間接的に主観的幸福感にも影響を与える可能性も考えられる。依存と協調性・開放性の関係性については引き続き研究していく必要がある。

## 引用文献

- 安藤玲子・坂元章・鈴木佳苗・森津太子(2001)インターネット利用と幸福感との因果関係：孤独感と対人不安の媒介効果, 日本性格心理学会発表論文集 10(0), 48-49
- 伊藤将晃 (2009) 大学生のインターネット中毒傾向に関する研究, 臨床教育心理学研究, 35, 9-14
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003) 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 74(3), 276-281
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニピノ(2012)日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み, パーソナリティ研究, 21(1), 40-52
- キンバリー・ヤング著, 小田島由美子訳 (1998) インターネット中毒まじめな警告です, 毎日新聞社
- 野崎優樹・子安増生(2015)情動コンピテンスプロフィール日本語短縮版の作成, 心理学研究, 86(2), 160-169
- 鄭艶花・野島一彦九 (2008) 大学生の<インターネット依存傾向プロセス>と<インターネット依存傾向自覚>に関する実証的研究, 九州大学心理学研究, 9, 111-117
- 諸井克英 (1991) 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討, 静岡大学人文論集, 42, 23-51
- 横山和仁 (2005) POMS 短縮版手引きと事例解説, 金子書房
- 総務省 (2017) 総務省情報通信白書平成 29 年版 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/> 2018 年 5 月 4 日ログイン
- 総務省 (2011) 総務省情報通信白書平成 23 年版 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/> 2018 年 5 月 4 日ログイン